

グラスラン『ペテルブルグ論文』における ルソーの「労働による土地所有権」と、分業・交換経済

山本英子（早稲田大学博士課程）

1. はじめに

在位して間もない啓蒙専制君主エカテリーナ（在位 1762-1792）が新法典編纂委員会を召集して西欧の啓蒙思想や農奴制の緩和等を検討していた 1766 年、聖ペテルブルグ経済・農業協会は、「農民が自分の土地を所有すること、あるいは、動産だけでも所有することは、公益にとって、より有益かつより有利か？ また、この所有はどこまで及ぶべきか？」という課題で論文を公募した。フィジオクラシーの論敵であったグラスラン（J.-J.-L. Graslin [仏語ではグラランと発音] 1727-1790）はこれに応募し、その論文（以下「ペテルブルグ論文」）は佳作となり、当該協会の『受賞論文集』（1768）に収められた。

この「ペテルブルグ論文」を評した津田（1962）と Faccarello（2009）の研究は、グラスランの議論の意義を認めつつも、原初的平等社会を志向しているという否定的な主旨となっているが、それらとは異なる肯定的評価を与えることが本研究の目的である。

グラスランは「ペテルブルグ論文」で、公益（bien public）とは国家の全成員の利益であるのだから、人口の大部分を占める隷属状態の農民が土地や動産の所有権を得て、その利益を享受することが、公益を最大化するために不可欠であるとした。その理由は、土地所有権のない農奴制の非効率性にあるとして、①生産への意欲の減退、②抑圧の下での競争心の減退、③強制的に連れて来られた労働力の流出しやすさの 3 点を挙げている。

グラスランは、土地を所有し「自らの手で耕す勤勉な農民」（Graslin 1768, 112）が、先祖から受け継いだ土地所有権を子孫にも残せることに啓発されて耕作し管理することが、生産力を増加させ、蓄積を可能にし、公益に資することを主張している。つまり、「ペテルブルグ論文」は原初的平等社会への志向を説いたのではなく、当時のフランスが置かれた商業社会へとロシアを導く原理として示されたものである。

2. グラスランの 3 段階モデル

2.1. 自然状態

まず、グラスランは「現代の哲学者」ルソーが提示した、生存に必要な耕作のための広さまでの「労働による土地所有権」論に言及しながら、所有権について、自然発生的な生産物に関しては万人のものであるとしても、労働によって働きかけなければ産出し得ない生産物については労働者の所有物であること、また、連続的な耕作を行うことによってその土地

の所有者となること、そして、「1 人の人間が彼の個人的な食糧を産出するために必要とする土地しか囲わないとすれば、土地は全員で等分に分配される状態になるだろうから、土地は全員のもの」となることを示した。しかし、ルソーに沿うこうした見解は、グラスランにとって「拡大され敷衍される必要」がある前提であった (Graslin 1768, 116-18)。

ルソーは、「自然状態」と「社会状態」を二項対立させたが、グラスランは「自然状態 (l'état naturel)」「関係状態 (l'état des relations)」「社会状態 (l'état social)」の 3 段階モデル¹を用いて、経済学的分析を加えながら、農民の土地所有の必要性とその効果を提示していく。

グラスランによる第 1 の「自然状態」は、「議論を単純化」するために、人間が 1 種類の生産物しか必要としないと仮定した自給自足の状態である。ここでは、各自が占有した土地での継続的な耕作が行われ、労働と果実を等しく分けることで相互利益を維持する「合意 convention」が存在しており、結束した少人数による完全な社会的秩序が形成されているとする² (Graslin 1768, 116-18)。この原型から次の段階へと進むのである。

2.2. 関係状態

第 2 段階の「関係状態」は、生産のための道具を製造する職工と耕作者との 2 つのクラス³に分かれて相互の労働の果実を交換する状態である。この分業・交換状態では、いかなる「合意」も存在せず、クラス間での分配・労働調整が自律的に成立するレッセ・フェールが想定され、各主体は生産物に対して等しい権利を持つ。

グラスランは、人間が 1 種類の生産物を、仲間の援助なしに一人で生産するとき、各自は労働時間の 1/4 を道具の製造に、残りの 3/4 を耕作に使う、と仮定を置く。これを分業によって、1 人の職工が自分以外の 3 人のための道具を、彼の全ての労働時間を使って製造し、3 人の耕作者は道具の製造に時間を費やさずに彼らの全ての時間を使って耕作し、収穫した生産物を各々 1/4 ずつ職工に与えることにする。職工たちは道具を提供することによって、生産物に対する権利を持ち、それゆえ、土地の実質的な共同所有者となる。こうして、「土

¹ Faccarello はグラスランの 3 段階を「自然状態」「関係状態」「覆された社会状態」としている (Faccarello 2009, 13) が、「覆された社会状態」はグラスランが「社会状態」の議論において、現実的な隷属状況として言及しているものであり、3 段階モデルの 1 つではない。

² グラスランとルソーの思想の近さを強調する Faccarello は、この「完全な社会秩序」の状態がグラスランにとっての理想の社会状態だとする。その理由として、グラスランがそれをシンプルに「社会状態 (the state of society)」と呼んでいるからだとしている (Faccarello 2009, 14)。しかし、グラスランは「自然状態」を「社会状態」とは呼んでいない。

³ 「ペテルブルグ論文」では、「classe」が身分制度の「階級」というより、分業で協働するグループ的な意味で用いられているため、それに該当する箇所には「クラス」という訳を充てる。

地は万人に帰属し、...万人は労働に応じて...生産物に対する権利を平等に持つ」(Graslin 1768, 125)。また、「交換には最も完全な平等が存在するのであり、それによって、耕作者たちの労働の果実の一部だけに対して、職工たちは彼らの労働の果実全体を差し出すのである」(Graslin 1768, 127)。こうして、構築された分業のネットワークは、「より少ない総労働で同量の欲求対象物を手に入れるか、対象物の量を増やすという有利な結果しか生じ得ない」(Graslin 1768, 138)のであり、新たな発明や更なる技術進歩があれば、その利益は労働移動が生じることで全体に波及する。

2.3. 社会状態

第2の「関係状態」に後見的権力が加わることで、その後見的権力の下で結束し、一つの国民を成す。これが、第3の「社会状態」である。グラスランは一共同体が分業・交換状態であるだけの「関係状態」では、敢えて「社会状態」とは見なさない⁴。「社会」とは、国内外の行政を担う後見的権力も含めた構成員全員の「利益の複合体」であり、新たに加わった主体である後見的権力が労働者の生産物に対して持つ権利は、その後見的権力自体が担う行政の諸機能のための人員の生存の必要に応じたものとなる (Graslin 1768, 141-42)。

3. グラスランの解

以上の3つの状態が、グラスランが提起したモデルである。しかし、「社会状態」における後見的権力が、人々を束縛することで権力を握る無為の支配者となり、土地を領有し、農民に生産物を無償で差し出させる状況になれば、このモデルの秩序が覆され (interverti)、あらゆる階級が不利益を被ることになる。隷属状態に追い込まれた農民は、無為の支配者に無償で差し出す生産物のために耕作労働を増加させなければ、各クラスが交換する対象物の生産物量は減少してしまう。生産物を増やすためには、より多くの土地の耕作も必要となり、農民はますます多くの労働負担を強いられることになる (Graslin 1768, 143-45)。

農民が隷属状態に追い込まれたこのような支配体制では、小作料に、徴税に、さらに、開拓・生産・修繕の費用計算に乱用が起こる。また、より少ない労働によって、より多くの収穫を得るために、耕作の改良が必要であっても、支配者も土地を借りている農民も、費用がかかる改良を行うことはないので、生産力は向上しない。しかし、改良が進まなければ、耕作労働にますます多くの人間が必要となるため、行政管理者として支配者に無償で奉仕で

⁴ グラスランは第2の「関係状態」を「社会」と呼ぶのは不適切だと述べている (Graslin, 118) にもかかわらず、Faccarello は分業状態を「社会」と呼ぶ (Faccarello 2009, 13)。

きる土地所有者は減少し、他の労働クラスも耕作労働への移動を余儀なくされる (Graslin 1768, 147-49)。

それゆえ、「自分自身の利益によって啓発され、自らの所有地を同じように彼の子孫に残すことができるという確実性によって気力を得る土地所有耕作者の管理 (les soins d'un propriétaire-cultivateur)」(Graslin 1768, 149) が、生産力を高める上で重要になる。つまり、「農民が各自で耕作可能であることを限度として土地所有者であること」(Graslin 1768, 142) が、自発的に耕作労働の改良を進めることを可能にし、また、費用等に乱用を起こさずに、支配者を含めた社会の各構成員に最大の利益をもたらすのである。このように、公共利益の増進は、農民が耕作可能な土地の広さの土地の排他的所有を必要とすることを根拠として、農民を土地所有から締め出してはならないという主張が導かれる。

農民が所有し得る動産 (家畜や農具) の所有については、耕作改良の手段となるという理由で、グラスランは、農民の手中にいくらあってもよいとするが、自分で利用可能な量に限定すべきだと述べる。また、土地の領有者がこの動産を所有して、農民に使用料を取って貸与したり、農民が動産を購入するための貨幣を貸与して年利を取ったりすることは、労働の産物に対する農民の権利を奪うことになるため、グラスランは、必要な動産は分業によって供給されるべきだとする。しかし、労働者たちが土地を所有し、自らの労働を増やすことによって生産物を蓄積することは彼らの自然権である。そして、彼らはその蓄積した生産物を交換によって他の欲求対象物を得る権利を持つのであり、この蓄積があらゆる人々にとっての最大の富と最も幸福な状態をもたらすことになる (Graslin 1768, 153-54)。

「ペテルブルグ論文」から読み取れるのは、所有権の根拠となる「各農民が自ら耕作可能な土地の限度」は、「自然状態」からずっと一定ではなく、拡大する可能性を持つという、ルソーの「生存に必要な耕作の広さまでの土地所有」論では発展させ得なかった、グラスランの認識である。改良や道具によって農業の生産力が向上し生産量が増えるということは、一定の面積での収穫量の増加と、1人の農民の耕作可能な土地の拡大の、両方を含むからであるが、この認識が、蓄積の概念と結び付けて公益最大化を説く彼のロジックを支えている。

グラスランは歴史的な発展段階の分析というよりも、むしろ、相互に独立した自給自足、分業、そして後見権力が加わる場合に分けて、土地所有耕作の利点と経済的利益の分析を試みた。グラスランが強調したのは、分業によってもたらされる生産効率性と、耕作者の土地所有権および動産所有権の安定によってもたらされる生産力の増加であった。これらによって、生産への意欲や「競争」(Graslin 1768, 112) が生まれることこそが、課題で示されたとおり、「公益にとって、より有益かつより有利」なのである。

4. おわりに

グラスランは『分析試論』(1767)において、欲求と希少性の複合的比率による主観価値

が相対価値（市場価値）を決定する消費論を論じているが、この「ペテルブルグ論文」は生産と分業の理論である。「ペテルブルグ論文」には価値（*valeur*）という語は一切登場せず、生産物の価値についても論じておらず、「労働価値」という語も存在しない。したがって、分業するクラス間で生産物や道具が交換される際には、個々の生産物の労働価値や市場価値を問題にしているのではない。仮に、同じ労働時間の成果物が交換されるとしても、グラスランの理論では、その交換物が同じ労働価値を持つという想定はない。労働にせよ交換対象物にせよ、それらの個別の1単位どうしの市場価値は、欲求と希少性に基づく主観価値によって決まるので、例えば、小麦10kgと鋤1つが同じ労働時間で生産されて交換されるとしても、グラスランにとってそれらの市場価値は異なることになる⁵。

また、「土地所有者は本来すべて『土地耕作者』でしかありえない...この観念は当時としてはむしろ陳腐なものとされつつあった」（津田1962, 82）としても、「土地所有者」と「土地耕作者」の同義性を議論に必要な起点としているのは、チュルゴ（1727-1781）も同様である（[1766]1914, 534/訳70-71）⁶。「陳腐」というよりむしろ、所有権についてのルソーの思想が当時は共有されていて、その敷衍が試みられていたと理解するべきであろう。

耕作可能な土地所有限度の拡大を認識しているグラスランの議論は、「先史時代的な平等社会をたんに自己の時代まで演繹したにとどまり、...重農主義的な『合法専制君主』政体をかれの抽象的な平等理念に適合させたにすぎなかった」（津田1962, 84）ものだろうか？少なくとも、「自然状態」からグラスランが「演繹した」「関係状態」と「社会状態」のモデルは、「重農主義的」でもなく、また「平等主義」（津田1962, 81, 84）として括られるものでもない。「ペテルブルグ論文」は農奴制社会から市場経済社会への発展論として認められたからこそ、当時のロシアで150もの応募論文の中から佳作として選出されたのであろう。

〈参考文献〉

Faccarello, G. 2009. The Enigmatic Graslin. A Rousseauist Bedrock for Classical

Économics? The European Journal of the History of Economic Thought 16 (1): 1-40.

Graslin, J. J. L. 1768. *Dissertation sur la Question proposé par la Société Économique de St. Pétersbourg*. In *Dissertation qui a remporté le prix sur la question posée en 1766 par la Société d'Économie et d'Agriculture à St. Pétersbourg, à laquelle on a joint les Pièces qui on eu l'Accessit*, 109-154.

津田内匠. 1962. 「J.-J.-Louis Graslin についての覚書き」『経済研究』13 (1): 80-84.

⁵ Faccarello は「ペテルブルグ論文」に、自然価格や均衡価格が労働価値によって決まるロジックを見ている（Faccarello 2009, 28-29）。

⁶ チュルゴは、土地を持たない「農業労働者」と分離することで、「土地所有者」の純生産物に着目し、フィジオクラシーの学説に副う議論へ進めていく（[1766]1914, 539-41/訳74-76）。